

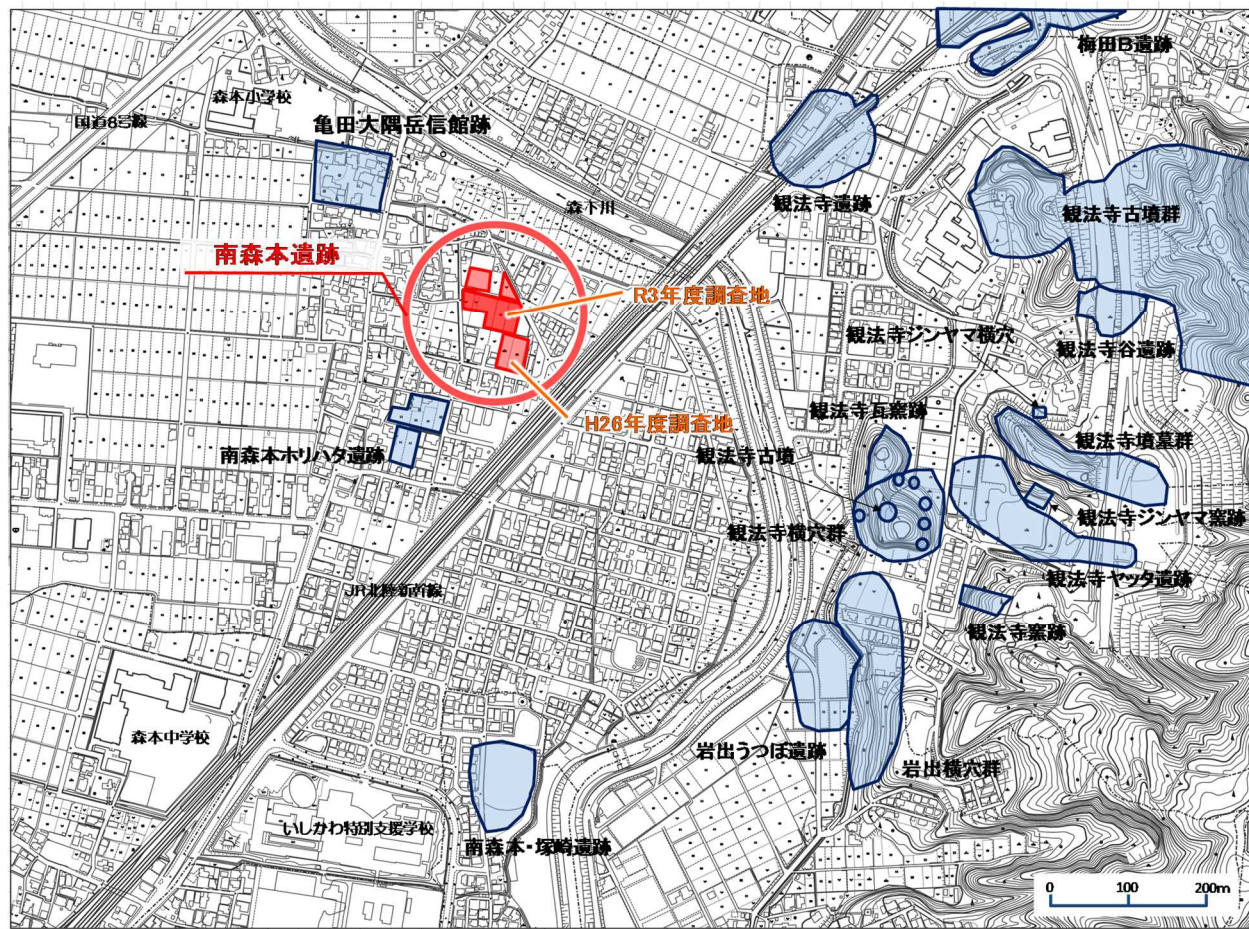
南森本遺跡現地説明会 資料

令和3年10月3日（日） 金沢市埋蔵文化財センター

1. 調査概要

調査原因	分譲宅地造成
調査期間	令和3年7月26日～令和3年10月初旬(予定)
調査地	金沢市南森本町ル地内
調査面積	約550㎡

2. 周辺の遺跡



南森本遺跡と周辺の遺跡

3. 発掘調査でみつかった遺構と遺物

今回の南森本遺跡の発掘調査では、弥生時代～古墳時代の溝、中世の堀、溝、土坑、小穴がみつかっています。弥生時代～古墳時代の溝からはほぼ完形の甕が出土しました。中世の遺構としては、堀の他、南北に延びる溝が9条、東西に延びる溝が4条みつかりました。小穴も多数みつかり、中には柱穴と考えられるものもあります。土師器皿、陶器、青磁、白磁、木製品、漆製品、石製品、古銭などが出土しています。

◆中世の堀（SD10旧・新）

調査区中央に南北方向に延びる堀（SD10旧・新）を検出しました。館の周囲に廻らせた堀であると考えられます。土の堆積状況を観察したところ、新旧2つの時期があることがわかりました。推定幅約4～5m、深さ約1.4mの堀を造り、それが埋まった、あるいは人の手で埋め立てた後、旧堀からは南側に3mほどずらして幅約7～8m、深さ約1.4mの新たな堀を造っています。堀の形状は新旧どちらも断面逆台形状の箱堀です。旧堀は15世紀前葉頃、新堀は15世紀後半頃には堀としての機能を終えていると考えられます。



◆大量の土師器皿の出土



新堀（SD10新）では、数百枚という大量の土師器皿がまとまって出土しています。土師器皿は、堀底から30cm程の間に密に堆積した状態で出土しました。土師器皿は15世紀中頃～後半のもので、土師器皿の他に、漆器碗や曲物、甕、板材なども出土しています。この大量の土師器皿はそのほとんどが完全な形のものでした。儀式や饗宴などにおいて酒杯や皿として大人数で大量に使用し、廃棄したものと考えられます。このことから、非日常的な儀式や饗宴を大規模に催すことができるような有力者の存在が想定されます。

4. 発掘調査でわかってきたこと

今回の発掘調査で大量の土師器皿が出土する中世の堀がみつかったことから、15世紀には有力者の館が存在していたのではないかと考えられます。調査地から250m北西方向には、森本の有力者亀田氏の館跡が現在もその姿を一部残しています。亀田氏は、美濃国守護土岐頼遠を祖とし、明応年中（1492～1501年）には森本地区に居住していたとされています。初代頼周は一向一揆の武将として、織田信長家臣の柴田勝家に対抗し、五代良周以降、代々加賀藩十村役を勤めるなど、森本地区が所在する河北郡域の歴史を物語る有力者です。今回の調査地周辺に「ハヤト」の地名があり、亀田氏初代頼周の子三郎隼人の館跡を指すと口伝されています。まさに今回の調査で有力者の館の堀を発見しましたが、伝承にある三郎隼人が活躍した16世紀末から17世紀初頭頃からは100年ほど遡るものでした。ただし、亀田氏は14世紀後半頃から森本周辺で居住していたという伝承があり、亀田氏一族などの有力者の館跡が見つかったといえます。

R3南森本遺跡発掘調査 概略図

SD05
古銭が出土しています。
永樂通寶…初鑄年1408年

新堀 (SD10新)

大量の遺物が約30cmにわたり堆積していました。
土師器皿、漆器、曲物、木製品、くるみなどがありました。新堀へ投棄されたものと考えられます。

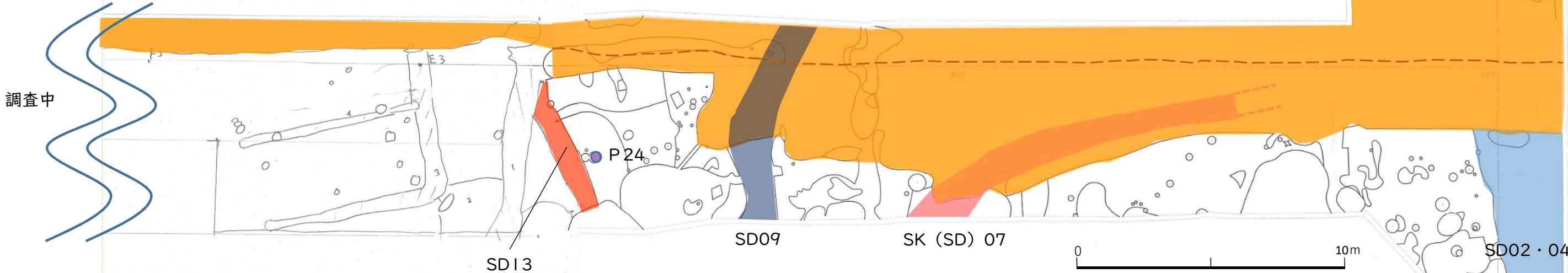
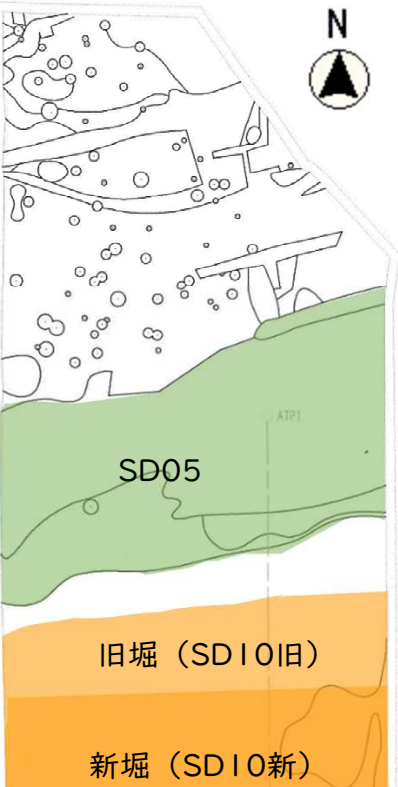


堀の形状には
こんな種類があります

- 毛拔堀 … U字型の断面
- 箱堀 … 逆台形型の断面
- 薬研堀 … V字型断面

毛拔堀、箱堀は底部の走行が可能となるため、水が張られることが多いです。

☆ 旧堀も新堀も箱堀です。



SD13

古墳時代前期の甕がほとんど完全に近い形で出土しています。



SD09

溝の底で土師器皿、漆器、砥石などが出土しています。土師器皿の中には、灯明皿もありました。



SK (SD) 07

炭と焼土が浅く堆積していました。溝の底で土師器皿が数多く出土しています。15世紀中頃～後半のものです。



土師器皿を埋めた柱穴

完形の土師器皿が1枚上を向いた状態で出土する柱穴があります。柱を抜いた後に土師器皿を埋めたようで、なんらかの儀式的な経緯があるものと考えられます。

